

『大方便仏報恩經』の成立問題

Sumet SUPALASET

0. はじめに

本經は父母、家族を捨てて出家するというブッダの宗教の本質が知恩・報恩という人間性の基本的理念に背反するものではないかとの外教からの批判を最初に掲げ、その批判に対処するために仏伝文学¹⁾の中から有名な須闍提太子の説話をはじめ、いくつかの印象深い説話を抽出して、その反証とした一種の編集物である。われわれが今回ことにこの資料に注目した所以は、過去において諸学者によって重要視されてきたにもかかわらず²⁾その成立に関して根本的な問題を含んでいる点に存する。私はその成立に関して次のような四つの可能性を想定した。(1)それが現行のままのかたちで、インドにおいて成立しており、それがそのまま中国に移入されて中国で翻訳された。(2)巻第六の優波離品第八を除いたかたちのものが、同じくインドから移入されて中国で翻訳された。(3)その時代までにバラバラに中国に移入され、翻訳されていたインド資料を中国において誰かが、仏教における知恩・報恩思想の存在を証明するという目的で編集した。(4)教養ある中国人学者が同じ目的でインド将来の諸資料にもとづいて著作した。以上のうち、現時点において私は(2)あるいは(3)であり、とくに(3)の可能性が高いと推測している。

1. 『薩婆多論』との関係における『大方便仏報恩經』

本資料には一つの顕著な特徴が存する。それは、その巻第六「憂波離品」第八の叙述の、その冒頭の枠物語的叙述を除いたすべてが『薩婆多毘尼毘婆沙』九卷(大正 23, No.1440, 略名『薩婆多論』)の第一巻の、まさに最初の行(大正 23, 503c11)からその最後の行(同, 510b9)に至るまでと、全く同じである、という事実である。この論に関しては平川彰博士の『律蔵の研究 I』(『平川彰著作集』第 9 卷, 1996)に厳密な資料批判がなされている。平川博士の資料論の要点は、

「この論の訳者は、大藏經では「失訳人名、今附秦録」とあって「失訳」であるが、訳語からみて十誦律以後の訳出と断じてよいものである」

とする点に存する。平川博士は、この資料が『出三藏記集』には収録されていないが、しかし、それがインドの言葉を説明するとき「秦言…」という表現を使うことから、そのインド成立であることは確かであり、また、それが「広律時代の訳語を用い、訳文全体の調子も広律と同じである」という点から、それを「秦代（一431）の訳出と見てよいものである」と断定しておられる。平川博士のこの結論に従うなら、われわれは『大方便仏報恩經』の中国における成立の上限をこの北朝の秦代（一431）という年代に求めてよいことになるであろう、なぜなら、現『大正大藏經』所収の『薩婆多論』の書き出しが

「仏陀者。秦言覺。覺了一切法相故」（大正 23, 503c）

というまことに唐突なものであるのに対して、それに対応する『大方便仏報恩經』の個所は

「爾時憂婆離白仏言。世尊。何所歸依名歸依仏。爾時如来一一称解。答曰仏陀者覺。覺了一切法相故」（大正 3, 154c26-29）

という、前行する枠物語との自然なつながりに直されているからである。

2. 經錄上における『大方便仏報恩經』

『大方便仏報恩經』の翻訳年代に関しては『仏書解説大辞典』では簡単に「七卷後漢代（一A.D.220）失訳」とされ、近年の『大藏經全解説大辞典』（雄山閣出版、平成10年）でも「訳者不明（A.D.220頃）」とされているに過ぎない。このうちの前者は730年成立の『開元録』第十二巻に「大方便仏報恩經十卷 失訳在後漢録」（大正50, 602b, 十は七の誤り）に依ったものと思われるが、この第十二巻は「刊定入藏録、有訳有本録」であり、このことはその著者智昇によってその実物が確認されていたことを意味する。しかし、前項で論じた『薩婆多論』引用の問題を仮りに度外視しても、本經の文体が後漢時代のような古いものとは到底思われず、すると『開元録』にいう「失訳在後漢録」という誤記事が諸經錄の奈辺に由来するものなのかが検討されねばならないことになる。

この検討においてまず注目するのは、僧祐によって510-18年に編集された『出三藏記集』（大正55, No.2145）巻第四の「新集統撰失訳雜經錄第一」の最初にあげられている「大方便報恩經七卷」（大正55, 21c11）という經名である。われわれはこの經名が後代の各經錄に「見吳録」と註記されている「大方便報恩經」と

(166) 『大方便報恩經』の成立問題 (S. SUPALASET)

いう一巻の、すでに失われている古い時代（後漢ないし呉）に訳された経と混同され、『開元録』における「失訳在後漢録」という伝承を生じたのではないかと想像するのである。

まず、一卷本の『大方便報恩經』であるが、これは『開元録』の所謂代録である第一巻の冒頭の後漢録中に「大方便報恩經一卷見呉録」（大正 55, 479a3）とあるのがそれである。これは直ちに 664 年に道宣によって撰せられた『大唐内典録』（大正 55, No.2149）第一巻における「後漢伝訳仏經録第一」における「大方便報恩經一卷見呉録」にさかのぼることができる。ところが、同じ『大唐内典録』巻第六には

「大方便報恩經七卷一百二十四紙 失訳見宝唱録」（大正 55, 289a）

という記事があり、同じく道宣の撰になる『続大唐内典録』（大正 55, No.2150）には

「大方便報恩經七卷右見呉録」（大正 55, 347a）

という記事が見られるのである。そして、この『続』における「大方便報恩經七卷」は、その前後関係によって『大唐内典録』巻第一における「大方便報恩經一卷見呉録」と同じものであることが知られるのであり、このことから、この段階においてすでに『大方便報恩經』七巻と『大方便報恩經』一巻の混同が起きており、そして、「見呉録」という記事は後者に関わるものであることが知られるのである。

では『開元録』における『大方便報恩經』七巻に対する「失訳在後漢録」という記事はどこに辿られるのかというなら、それはまず、『大唐内典録』巻第九の中の

「大方便報恩經七卷一百二十四紙 失訳時代」（大正 55, 314a）

という記事に辿られる。この経は同じ『大唐内典録』巻第六の前掲の同名経と同じものであり、したがってこの巻第九における「失訳時代」という記事は巻第六における「失訳見宝唱録」と同一の事であることが知られるのである。

そこで問題はこの「失訳見宝唱録」という記事に戻るのであるが、518 年成立の『宝唱録』は伝わっていないため、われわれは 510-18 年成立の『出三蔵記集』にその対応記事を探す以外にないのであるが、そこに見出すものがはじめに触れた「大方便報恩經七巻」（大正 55, 21a）の記事なのであり、ここにわれわれは、此経と同じものである筈のわれわれの『大方便報恩經』七巻の下限を見出すのである。

では、この七巻本に対する『開元録』の「在後漢録」という記事はどこに由来するのであろうか。それは597年に成立した『歷代三宝紀』(大正49, No.2034)の巻第四の「後漢録」の中にある「大方便報恩經七卷」(大正49, 54b18)という記述に見出されるのであり、しかもわれわれは同じ「後漢録」中に「大方便報恩經一卷見吳録」(大正49, 53a11)という記事をも見出すのである。では、われわれは七巻本「大方便報恩經」すなわちわれわれの『大方便仏報恩經』の後漢時代の訳出を信じてよいのであろうか。

林屋友次郎博士は『仏書解説大辞典』第十一巻において此經録の撰者費長房の撰集方針に「非常な無理」の存する所以を縷々説明しておられる。では、上の「大方便報恩經七卷」を「後漢録」中に収めたことがその「非常な無理」の可能性の内にあるものとするなら、われわれはその当否をどこに求めたらよいのか。それは当然その直前594年に撰せられた『法經録』(大正55, No.2140)に於いてであろう。現にわれわれはその第一巻「衆經失訳三」の中に「大方便報恩經七卷」(大正55, 120b)の記事を見出すのであり、ここにおいてわれわれは『大方便仏報恩經』七巻の『開元録』に由来する「在後漢録」という記事の制約を離れ、このテキストの成立の下限を『出三蔵記集』の成立年代510-18に回帰せしめることを得、このテキストを北朝の秦代(一431)における『薩婆多毘尼毘婆沙』訳出以後、六世紀初頭に至る間に、中国において翻訳ないしはインド成立の資料にもとづいて編集されたものと見做すことが出来る。

-
- 1) 私は所謂小乗仏教の圏域に属し、その内に大乘仏教の展開のための論理的基盤を用意する仏伝文学の研究をこころざし、その過程で『大方便仏報恩經』七巻(大正3, No.156)というテキストに特殊な興味を持つに至った。大乘仏教の展開のための論理的基盤を用意する仏伝文学という解釈については、例えば、津田眞一著『アーラヤの世界とその神』p.311以下における〈レーベンのジャータカ的解釈〉の理論を参照。
 - 2) 『經律異相』(大正53, No.2121)は十二ヶ所(p.23a26-23b6; 23b7-15; 37a26-37c28; 71b22-73a28; 116a21-116b24; 118c9-119a8; 131c22-132b26; 137a4-137c4; 163a26-163b18; 163c18-164c10; 171a26-174a21; 258b10-19)においてこの『大方便仏報恩經』をとり上げている。

〈キーワード〉『大方便仏報恩經』, 「憂波離品」, 『薩婆多毘尼毘婆沙』

(国際仏教学大学院大学博士後期課程)